

## 気化熱で水を冷やす

スーダン東北部リバーナイル州を、南から北へうねって流れるナイル川に沿って建設された38の州営灌漑スキームは、合計して約12万ヘクタールを灌漑し、受益農家が約4万世帯にのぼる。年平均降水量が50ミリ以下の乾燥気候のこの地では、食糧はほぼすべてナイル川の灌漑水から得る。夏期の気温は30~40℃のはずだったが、調査業務で訪れた9月は連日40℃を超えた。水分は何でもすぐに蒸発して汗をかいた記憶がない。熱風が吹いて日陰にいても暑さをしのぐことはできなかった。

町や村のいたるところに大きな素焼きの水甕が置いてある。水道水を入れ、甕のまわりから水分がゆっくりと蒸発して気化熱で中の水が冷やされ、冷蔵庫で保存してあったかと思うほど冷たい水になっている。甕の水は誰でもいつでもただで飲める。水道の蛇口から出るナイル川の水は生ぬるく、細かい砂のシルトが混じ



って黄色い。

麻袋でカバーされた白いポリタンクが市場や街頭で売られている。麻袋を濡らしておくことで気化熱でポリタンクの水の温度が下がる。人が乗るロバやラクダにぶら下げているのをよく見る。2つのタンクをロープでつないで、町の中を行くときや農作業に通うときはロバの背に括り付けて、街を出て砂漠に行くときはラクダの背に下げる。携帯の個人用冷水ポリタンである。(河野 尚由)

“アールディーアイ通信 No. 116/2021”から

写真: 街頭で売られる麻袋に包まれた水ポリタンク

スーダン・リバーナイル州 2021年

## パラオのフィッシュマーケット

パラオは386の島々からなる人口わずか2万人足らずの小国。主要な島々はほぼサンゴ礁に囲まれており、そこを漁場とする漁業は古来、常に人々の生活を支える業となってきた。海外から食肉の輸入が容易となり、パラオ人の食生活は変容してきているものの、魚は今でも日常の食生活に欠かせないものとなっている。人々は気軽にサンゴ礁に漁に出かけ、魚介類を自給する他、販売も行って生活の糧としている。

パラオの最大都市コロールには国で唯一の魚市場“ハッピーフィッシュマーケット”がある。魚市場といっても、人口2万人の国。日本の魚市場のように仲買人が買い付けるといったものではなく、単に漁民が取ってきたほんの少量の魚が売られている魚屋のようなものである。主な魚種としては、フェダイ、ハタ、コロダイ、ブダイ、ニザダイ等新鮮な白身魚でキロ5ドル程と安価。リーフフィッシュにありがちなシガテラ毒や海藻臭も無く、刺身、煮つけ等日本風に調理しても美味であり、日本人にはありがたい限りである。(矢野 史俊)



【シガテラ毒: 魚介類が餌にする藻類のシガテラ毒の生体内蓄積により発生する食中毒。食物連鎖の上位に位置する魚類に要注意。神経、胃腸に障害が生ずる(広報部)】“アールディーアイ通信

No115/2021”から

写真: バベルダオブ島西部に位置するアルモノグイ州の浜辺

左下: 魚市場内では魚の内臓と鱗を取ってくれる。パラオ 2021年

## ドミニカ共和国でカカオポッドは鋭利な刃物で切り落とす

研修コースに参加した研修員が帰国後、所属先で従事する普及活動のモニタリングのため、首都から車で1時間程の帰国研修員の家に2週間ほどホームステイさせてもらった。集落内の知人の家に立ち寄った時、カカオの木と実を初めて見た。太い幹にポコポコとカカオポッドがぶら下がる姿を興味津々眺めていると、おじさんが刃物を持ち出してきて、こんな風に収穫するんだとやって見せてくれた。メディア・ルナという、高い樹に生る果実などの収穫に使われる道具であった。手が届くのであれば、マチューテ(山刀)、収穫鋏や剪定鋏が使われる。カカオポッドは、引っ張ったり、もぎ取ったりすると樹皮を傷つけ、周りの花芽もダメにするので、刃をよく研いだ道具で収穫する。落としたカカオポッドを拾い集め、割って中の種と白い果肉(食べられる、種の発酵に使われる)を取り出し、生産者組合や民間業者の発酵乾燥施設に運ぶ。



写真: 収穫に「半月」という意味のメディア・ルナを使う  
ドミニカ共和国・ヤマサ市ママ・ティンゴ区 2015年

## ホバール島をココナッツの楽園に

エルサルバドルの農業にとって、生産増大と価値の高い農産物の選択は喫緊の課題である。バナナ、ゴマ、カカオなど有望な工芸作物の生産、流通状況を調査するため、各地の生産者と生産組織を訪ねて回った。ホバール島(正式名称はエルスピリトゥサント島)にある、ココナッツ油を生産する組合も訪ねた。首都の南東にラムサール条約に登録されたヒキリスコ湾がある。マングローブ林が発達した湾内にある島へは、船外機付きの小型船でおおよそ20分であった。ほぼ平坦な島の面積は約14平方キロメートル、海岸沿いはマングローブ林、その内側には主にココヤシが栽培され、450戸ほどの農家世帯が暮らす。

ホバール生産組合は1980年に設立され、ココナッツ油を精製する工場の操業を主な組合活動とする。コプラを加熱圧搾して油を精製し、搾りかすは家畜飼料として販売する。ココナッツが主力だが、農産物の多様化を考えていて、カシューナッツ、間作物のカカオ、ゴマ、バナナを栽培してきた。いずれも、取引価格の下落、輸出の不調等で第二の確たる産物になっていない。豊かな観光資源を生かしたアグロエコツーリズムは、経済活性化の一手段と考えられる。が、マングローブ林の中に組織犯罪集団のマラスが逃げ込むことがあ



て治安状況に注意が必要、というのが気にかかる。(高橋 貞雄)“アールディーアイ通信 No. 113/2021”から

写真: ヤシの繊維部分は燃やして工場の燃料の一部として使用する。手前はカカオの実を乾燥中。

ホバール島のオイル精製工場 2021年

### キリマネの新型コロナウイルス感染症 その3

モザンビークのザンベジア州で実施中の技術協力プロジェクトは、依然としてリモート(遠隔)対応を継続している。業務進捗状況のやり取りに限らず、コロナ禍の下での暮らしの様子も知らせ合っている。

モザンビークの日本国大使館情報(2021年4月12日付)によると、1月から2月までのおよそ1カ月間のザンベジア州の感染者増は1,213名で、それまで1カ月ごとの増加数は3桁より小さかったものが4桁になった。3月から4月までは768名で、やや落ち着いてきたかの様子である。この間、1月末以降、劇場、映画館、文化センター、ジム等が閉鎖、酒類販売目的のバーや屋台も閉鎖されている。3月上旬から4月21日までマプト都市圏と全州都を対象に夜間(22時~4時)の外出禁止令が出ている。プロジェクトの秘書によると、「新型コロナウイルス感染症は自分たちには関係のない病気」と思っていた人が多かったが、周辺で患者が



発生し、政府の強制力を伴う指導もあって、今はマスクをしている。公共の場や公共交通機関でのマスク着用は義務化されていて、キリマネ市内をマスク無しで歩くと警察に捕まるそうである。人が集まる催しに人数制限があるため、イースター(復活祭)は特にお祝いをしなかった。例年、メーデーの5月1日にはキリマネでもお祝い行事があるが、今年は、このお祝いもしないようである。(大竹 雅洋) “アールディーアイ通信 No. 112/2021”から

写真:チャリタクもマスクを着用

撮影:Margarida Acissa Abdul Jose Salvador キリマネ市 2021年

### エルサルバドルの新型コロナウイルス感染症対策

エルサルバドルでは、新型コロナウイルス(COVID-19)感染症対策として、2020年3月から6月まで自宅待機命令が発出され、待機期間中は身分証明書の末尾番号に従って週1回のみでの外出が許可された。その後、経済活動の段階的再開プランが発表され、国際空港が9月末に再開されて、10月10日にCOVID-19の陰性証明(72時間以内の検査結果)を得て、企画調査員業務に就くため入国した。

首都のサンサルバドル市周辺の地域は治安対策上、平時でも移動が制限されている。市場は治安面から最も危険な地区に指定され、出入りが禁止されたため、人の暮らしが凝縮された場所を見学出来ないでいる。



COVID-19 予防対策が加わって外出がままならず、職場である JICA 事務所と滞在するホテル周辺の状況しかわからないが、マスクの着用は徹底されている。スーパーマーケットや食堂などの入店には検温とアルコール消毒に加え、靴が消毒される。ホテル内でも部屋を出るときはマスクをすることになっている。

首都を中心に人口密度が高い国であり、感染拡大が始まると一気に蔓延するのではと心配である。「感染しない、させない」を意識して日常を過ごしていきたい。(高橋 貞雄) “アールディーアイ通信 No. 111/2021”から

写真:企業の広告を兼ねた COVID-19 感染予防の看板があちこちに立つ

サッカーの国代表選手ラファ・ブルゴスの呼びかけ:決してマスクを外さないように。感染防止のルールを守ろう。サンサルバドル市 2021年